



奇說排悶録

吉田屋

五

3143
5



王福徴

族次監生

哈九

黃中

寶發生傳

合十二種

奇說排門録卷之五

吉屋高誼之部

熊公

六樹園翁 譯

熊公廷弼と云人江南名地の習学する時書生等の文章を長机の上
 へ並べ置き左右酒一罇と劍一口を置たり。其筆を執り讀みたり。批判
 けり。其中小佳文章を閱むる時大白ゆく酒を飲み此を賞す。
 其拙き巻を讀めり。劍を抜き振廻し。情の辭を暗しけり。斯公を用ひ
 る。依り江南の内馬才碩学の者。埋まる者。入るる。りけり。名
 高は呉国の馮夢龍也。其門下よりぞ出る。此夢龍ハ戲作をも好む人。
 桂枝兒の小曲。葉子新闘譜。と云物。皆此人の作り。浮薄の子弟

父兄大い怒下り。夢龍が所為を言ふ。口は要路の
 夢龍が身の上。加る程のちりけ。夢龍甚迷惑。其時熊公
 告暇し。家小居らば。夢龍急舟を西江名小後へ。熊
 公の許小来り。熊公小見え。其夏の治らん。成替へんと。思ひけり。いやく
 口より出さる。先小熊公不圖言出さ。けり。當時世。足下の桂枝見の
 曲を盛小称美。由及り。若携へ玉。老夫小二冊を惠。望
 々。夢龍大い赤面。答へん言も無。唯恐と入。居。漸その
 る。あ。夏。依。救。蒙。遠。泰。申
 一。熊公。易。取計。心遣。有。先

飯をまのせんと。暫。魚。熊。栗。添。出。高
 夢龍ハ斯。惡食。食。食。居。熊公曰朝
 美味。羞。食。下。書。斯。食。下。魚
 呢下を待。如何。丈夫。者。飲。食。小。美。惡。を。論。と。魚
 食。飽。食。真。の。英。雄。は。相。伴。せ。ん。と。其。品。を
 を。残。ら。ず。食。盡。さ。し。夢。龍。も。為。方。る。強。く。著。を。取。り。食。けり。
 熊公座を起。奥へ。良。有。く。書。一。通。を。持。出。て。云。我。故。人。某。の。許。へ。歸。路
 の。便。小。届。玉。と。忘。る。夏。と。云。夢。龍。曰。此。度。の。り。枚。の。成
 求。む。と。い。く。熊。公。口。へ。ど。ゆ。づ。一。の。冬。此。を。持。出。て。贈。の。り。と。そ。と。ふ
 此。冬。此。重。さ。數。十。斤。わ。り。夢。龍。謹。々。受。け。る。意。快。と。し。と。本。意。を。く

立出しが冬風の重なる堪ふもく。うち捨るが船は帰け。漕舟して數日を
 経る。大なる湊に至る舟を泊ま。熊公の書簡を寄らまう。人の家も茲
 ありけり。人々も届させ居る。其主人自身舟へ乗りて夢龍と
 逢即案内して其家に至る。席に就と齊く。山海の珍味を出し。妓女
 數ヲ来す。舞謠て酒を述む。酒筵終りて。後主人夢龍に向て曰。先
 生の文章才辨。誠無比類なり。天下の人皆相識成らんるを願へ。今日
 計らば先臨し。おの夏上も亦幸なり。城は天下を奇縁を結び居る
 あり。然るにも當地と貴國と。遙隔る。殊に斯る苦しむるを
 久く留り奉り。かごと。輕微の賤別を従者す。進上致せり。と云ふ。夢龍
 は始終をもち。解せざること。先丁寧に謝し。暇を乞ふ。舟へ歸る。白銀

三百兩先達と昇居る。則主人の賤なり。叔家へ歸りける。彼許へ
 らまう。るは。熊公の當路の人。飛札を送らまう。力より。早
 事。徳使小静。やま。夢龍へ始と安む。熊公の恩。感。多。と
 熊公。元。來。夢龍。を。愛。せ。ま。う。と。云。ふ。夢龍。餘。才。を。顯。へ。名。を。か。や
 か。ま。う。る。成。戒。め。ん。と。云。ふ。と。廉。略。め。り。て。ち。り。と。城。は。富。人。の。み。を。借
 り。財。を。助。け。難。儀。の。筋。を。も。人。知。ま。ず。救。へ。ま。う。英。豪。の。ま。う。と。云。ふ。人。の
 測。知。る。ま。う。と。云。ふ。斯。の。如。し。

武林高士

嘗。孝。廉。前。小。谷。ら。ま。う。吳。郡。地。の。徐。昭。と。云。人。死。せ。し。時。貧。窮。な
 しく。葬。を。管。む。る。ま。う。難。か。り。し。其。友。武。林。地。の。高。士。何。某。口。巾。以。來。と

此体をつんく。葬すの事を二人と引受て。此人も又貧しく。貯る
 ちつちけきども。元來八分を善のたけと。其近邊の家を貸し。書を齎す。
 其直を積と。此支を。遂行んと。謀す。其國の人。此由を告げ。其
 高義を尊す。我もくと。買たる程。勿忽數十金を得。乃日を止
 と。葬す。其餘。其金を徐昭子。與へ。喪中の入用とせ。何某云々
 吾富人。小請り。是程の金借来ら。最易と。先生の靈恐ら。悦
 悦め。依と。斯の謀ひ。と云々。其姓名の傳へ。惜む。死
 事あり。

張文

揚繼宗 揚民繼宗名 刑部主事の官 時河間府 地名あり て盜

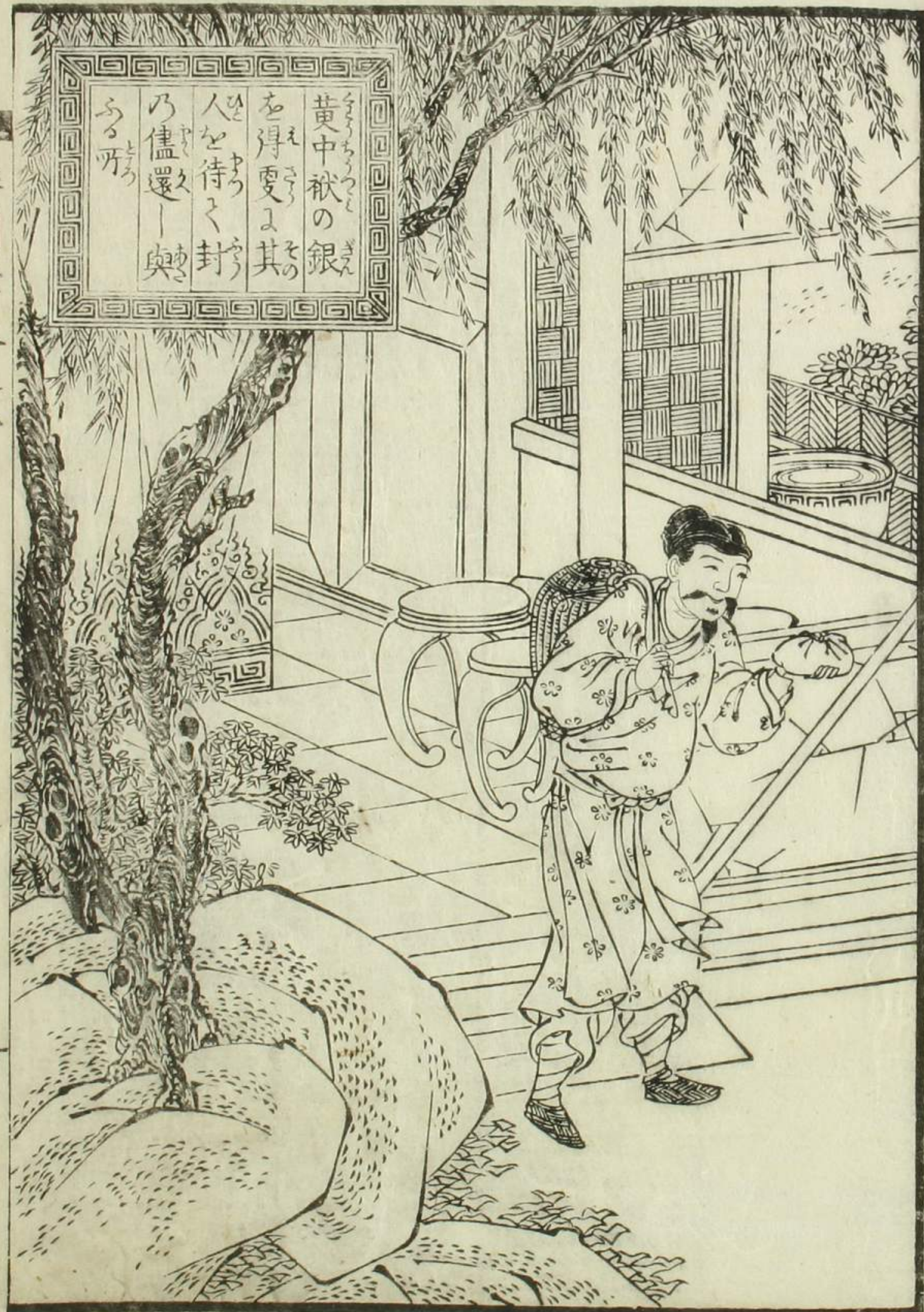
一人を捕へ。隸する。張文。郭禮と云。二人の者を付。彼盜を警護し。
 京都へ上せ。此盜途中。夜の間に。枷を引切。遁去。翌日。二
 人大に驚き。けきども。為方。張文。郭禮。向と云。凡盜を取。速
 する者。其罪盜と同罪。五口等。二人皆死罪を遁る。處々。二
 二人共死。無益。五口。汝の老母有と。兄弟。汝死せば。老母
 も亦死せん。吁。吾の盜あり。と。枷を如。我を送。京師へ至。盜を取
 遁せ。深く。鞠む。左。吾入死。汝母子二人を助。と云。以
 け。郭禮。涙を流。謝。其計の如く。刑部へ指。時。揚繼宗
 張文。言語。動止。盜。死者。と。え。吾。汝。惟。委。吟。味。せ。け。郭
 禮。實情。を。白。状。せ。繼宗。張文。が。義。を。感。二人。共。釋。其。真。の

盗も不日捕へりて是けるをぞ。

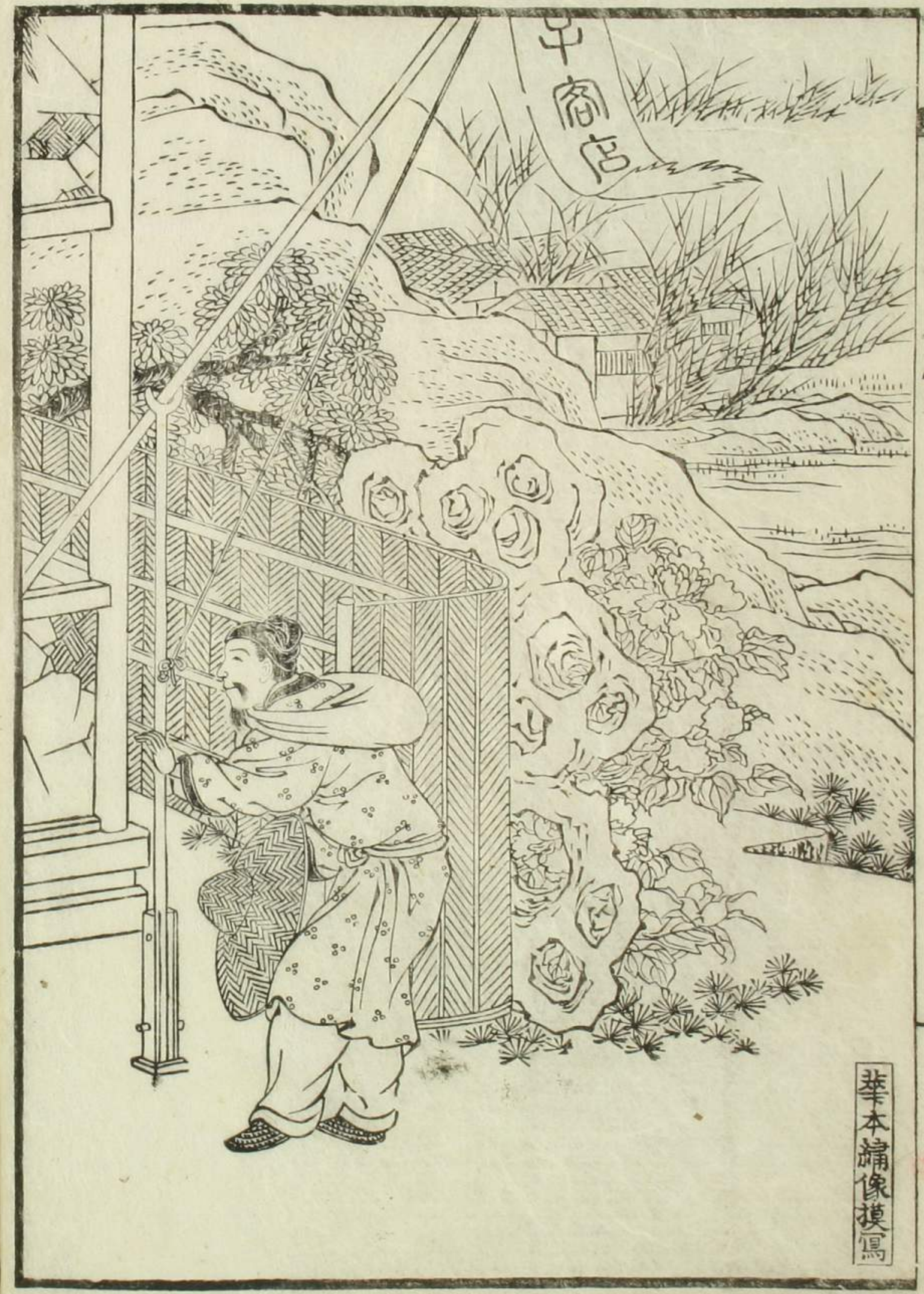
雪溝

海寧地名の查孝廉。名を培。字は伊璜と云人も。文才人は勝る。氣象俗を
らむ。世人の皆俗なるを厭ひて。格外なる處を尋とて。真の豪傑の如く
めと。常め言ひけるが。或日只獨酒飲て居る。折しも歳の暮。大雪
頻に降る。孝廉此景色を獨賞せん。本意をて。門を去り四方を
望み。之食一人廬の下に立居る。孝廉熟くと見く。此凡人の非と密に
呼く。伴ひ入ると問く。曰此項人の噂を聞ふ杖をもつて物もいへず。故に衣
服を着く。然も空腹なる。饑寒する顔色もせむ。異名を鐵丐といふ者
と。聞及ぶらぬ。汝もやと問く。且然と答ふ。酒の吞やと問ふ。能飲候と答ふ

孝廉侍童の命。大器の酒を酌と與へしめ。怒飲盡し。孝
廉大の喜と重と酒を煖ゆせ。鐵丐の約と曰。汝の其大器を飲し。
我ハ此后ゆく飲んと。酒盛を始とす。鐵丐も大上戸ゆく。大器を
三。杯餘飲とす。酔ふ氣色もする。孝廉ハ既ハ酔とけ。侍
童等肩の掛と奥へ入ると。鐵丐も出た。又廬の下に歸と其夜を
明とす。翌朝孝廉目を醒と。家内の者も云く。昨日鐵丐と酒を飲
と。甚樂し。彼が着る藍縷ゆく。此寒氣を禦とす。自身
の綿入と出と。與へて。彼鐵丐其服を着と。孝廉ハ禮謝を
せ。何困とも无と云。けり。明年孝廉ハ杭州の長明寺名とて。寓
居し。三月の初。友人少と。打連酒を携て。西湖名と遊び。時。放鶴



非司録卷之五



非司録卷之五

華本繡像模寫

谷の間の道匿と一人も捕るる者あり。時六奇獨
 徐歩來る。邏兵執て本陣へ送る。六奇大将小見く貝小
 の地理を説た。扱云けり。僕と兄弟の約をる。者二十人あり。皆雄武
 者。天下の明主を依る。各軍勢を集め。所々一揆と成て。わ
 今明主天下を定め。官軍南へ下る。誠の萬民獲生を得。豪傑功
 を立るの時至る。願く僕に檄を假し。王彼兄弟共を喻。七
 味方はせいん。左あり。近死者を馳。遠死者を麻。従ひ。城破竹
 の勢あり。一月の間に。此國皆平均仕らんと云。大将其言。所の如くせ
 久。暫時小粵の國悉平均。此後六奇ハ數日の堅陣強敵を伐破て
 勇名を揚げ。奇策妙計を運。大功を立。閩。蜀。を征。蜀。名。成

討し。時ハ度々奇功を立。數年の間に。通省水陸提督。諸所の水
 官の位に至る。初六奇が流浪。巧人とあり。時ハ生涯埋木
 あり。と思定め居。查考廉又遇。衣服金銀を送。其上
 海内の豪傑あり。見定め。天下の第一の知己を得。遂に
 心を勵。奇功を立。匹夫と興。大將軍の登。康熙の初。又
 府を捕。列州。時牙將を遣。二千金を以。孝廉の家。贈。且
 別書并幣物を具。孝廉を優。孝廉即粵。類。舟并
 輿等。其外の調度。皆美麗を。梅嶺。更。名。越。ん
 と。六奇が子息の吳公子。迎。大。孝廉を尊。敬。也。夫。と。
 樓船。乘。徒。玉。簫。樂。を。奏。し。江。流。頃。南。下。る。時。吳

六奇が轄下の文武の官属皆孝廉ふんえんと我もくと争ひて贈り物
 一ヶ程錦綺珠玉山のごく積上る循列の城下二十里の外まで六奇
 自身出迎へ前中より嚴重の道を拂ひ後中より千騎計も従ひ續て其行
 装諸侯王天子の一族の大名天子の一族必劣らざり既而府に至る時孝廉と上坐し直に六
 奇首を地ぬつけく曰昔流浪せし時先生も遇せざり一生乞入りて朽果
 を食ふ今日の花は皆先生のため今先生幸ふ降臨しぬるこそ辱らる
 とく喜びたり孝廉此地に居るより一年軍務何とせと繁ヨマるるを査考
 廉一言を答へ六奇皆敬ぶ其言に隨ふ故に諸人益孝廉を尊敬し贈
 物幾千万と云敷をもちて孝廉家へ帰らんとする時六奇又三千金を
 与へ曰此輕微の餞勿論先生の高恩萬分の一二をも報せざるべからず唯

聊惟陰の少年が徳を忘るるありやうのと云く贈る其後孝廉が父
 の上め不意の大難出来ぬ其原は元年廿中地の富人莊廷鉞と云者明の
 困姓爺朱相困の史統と云書を得て博く兵中の名士十八餘人増益
 修飾し御本とつけの時め査孝廉名高き文人ありけり竊み其名をも
 右の書参閣考訂の連名の列に書加へるが其後此事朝廷へ告え凡其書
 ぬ加わらざる人皆死罪に處せらるべしを決せん
 六奇査孝廉實を知らざる由を詳め奏し辨じ此難を救ひたり兵より
 して孝廉へ益世の六つ酒と持て來樂とかの財宝とせり美死重
 女十二人を買て歌舞を教へ良夜必必廉を番燈を張り舞歌せり其情
 声花の容廉外め使れり觀る人心を奪はせけり孝廉の夫人も音律に精

く建一け六。自拍板を打く。伎女共の音曲を奏す。正室は傍故の查氏
 の女樂亮の所細中第一と稱せし。昔孝廉は其の許に在り。時園林の
 景色極く佳し。中み大なる英石峰。百の形面白く。其の如く。石英は
 一有る。高き二丈許。其見更なる。言はん。孝廉大に賞美し。其
 名を緇雲とす。其後十日計。徑く。孝廉又園中み往る。彼石に。其
 惟く。是を同ぬかの賞美し。其の成。呉將軍が。其大船のせ。孝廉
 の家。贈り遣ふ。ありけ。江を渡り。山を越。其費用。又千緡。智鏡
 餘りぬ。今。今。今。世と成。と。查孝廉が。栄花も。夢と。歌舞の美人も。皆
 年老。林荒池の水も。涸ぬ。英石峰。心。昔。形見。其儘。と。其
 毛。

董継芳

鉅鹿の地。大學生董継芳と云者。城京の地。小樹村と云地。住め。其
 父仲璋。洞縣の人。吉夢川と云者。券を以て。百金を借。貧。返
 得。其後打續。中璋も。夢川も。死。孫。惠迪。中璋が。券
 ぬ。其後。継芳が。負。券。遂。催促。せ。継芳。借。金
 ぬ。其後。知。券。持。催促。せ。事。を。成。惠迪。許
 ぬ。家屋敷を以て。借金。の代。與。へ。と。云。惠迪。引。再。強
 と。云。惠迪。其。後。飢。饑。の時。惠迪。彼。家。を。外。賣。多
 百金。より。直。減。り。継芳。又。其。不。足。程。の。金。を。入。借。惠迪。許
 ぬ。持。行。日。君。祖。吾。父。と。睦。り。百金。を。借。王。先。建。其

松生 五

償ふ悉くきく。家の値百金も不足せりと何故か此金ゆく補へんと言ふ
けま。惠遠堅く辨し。日。彼家實を百金も當まき。急め賣んとせし
故より少く下直ちりし。君が與るるの非むと云ふ。あつ又受む故に継芳
も為方々。近隣の人を雇ふ。惠遠へ様と云けし。已畢を得し。其金
を受ふ。縣令陳汝明。此る瓜聞く。西人の義を賞し。文を作し。此夏
を記す。新安商

新安商

新安名の商人何某と云る者。萬曆年壬午の年。江西地へ西貝行し。時九
江の江を過る。舟舟盗賊の舟。衣服調度を皆奪去す。船中に入七人あり
一が皆裸より悲居る。此商人見付く衣食を與る。後何方行人

そと尋ぬふ。何れも秀才。前よりゆく。都へ及第。又往者あり。と云。商人此を復て
夫々資資を贈り。皆位を流し。喜まむ。翌年此中六人
進士。学校の役名。六人の中一人。方萬策と云人。數年過く。此萬
策。嘉湖地を分巡せし時。副使屠冲陽の家。酒宴を招く。其家僕
の中。先年難を救ひ。商人雜に居る。萬策。遙く見付く。呼し。問
く。爾。新安の商人何某ありや。と云。然りと答ふ。江西地へ往し。其
や。と問へ。ありと答ふ。八年以前。江中ゆく。盗み遇し。秀才共を救ひ。其
ありや。と問ふ。此商人良久く。漸く答ひ。あり。のあり。と答ふ。萬
策。此を復て。齊し。坐を立。商人の前。跪く。曰。吾が恩入る。數年。其
如き。行方。知し。何故。斯く。成玉。ひと。尋け。答と。曰。追。損失

打續死家産を破す故已むるを得ず。此家身を燬るると答ふ。
萬策直小屠冲陽の告く此商を署中へ伴以歸る。叔同難の人々此由云
遣多各厚く贈物をあつたり。萬策へ別小千金を贈り。此商人怒すこ
富人とあつると。故郷へ歸すなり。

陸采候

呉門の陸采候と云者心爽なり。意氣也。或時何某と云る商人
其家小采と細綴子等の品々を買取。已小歸らんとけり。折節九月
八日ありけり。陸采候此を留め。日明日重陽るま。例の如く山小登す
酒をそ飲へ。此佳節をあつたり。舟路ぬかむと玉なる。無下あつたり。
強く留めけり。商人も最こと同じ。則其貨物共を外の宿所へ置く。

翌日采候 従て治平寺と云山寺の上。終日醉を盡し。歸けり。其日
彼ら一置家失火。貨物も焼失ぬ。采候驚死。身は高く
向く日。此貨舟積る前。我貨物も同じ。況や君已小昨日歸らんとす。我
吾強く留る。強く留む。此災火の罹る。然るに此貨も吾償ふ。登
死る勿論とす。其値を残り。與へけり。商人甚感。喜去る。陸
采候も弟と同居。居る。其後陸采候が鄰家より。火事出来けり。
陸氏が家を残り。左右の家々皆焼失。程徑く又前の如く。燒
つ。陸氏が家へ今度も恙なく残り。其時左鄰の高橋陸氏の
方へ。折し。采候兄弟。其下小む。とす。観る人。敬馬悲
く。西へ定く。微塵もあつたり。急ぎ堀出し。此を見。小とす。

藩の中うちの自空みづからある所ところあり。采候さいこう兄弟あに慄々おそおそ坐ま居ゐる。兩人ふたり共とも傷きずつつむ。危あや難しを免まぬれるとある。

王福徴

三河三河の諸生しよせいの時とき請待まをせる人の許もとへ往ゆる道みち小湊川こみなとがわあり。其傷きずは白金しろがね一袋ひとふくろあり。何なにを其主そのぬしへ還かへさんと必かならず往ゆるとする方かたへも行くゆ。晩方ばんぱうより待居まちる。一人ひとり遠とほく去さる者ものあり。福徴ふくてい此人このひとを必かならず汝失なする物ものありと向むかふ。此人このひと答こたへて曰いふ。某債あつちを取とり集あつめ。銀百七十兩ぎんひゃくしちりやうを得える。成本なりてより。江えを過すり米こめを買かひ。若も拾ひろふ者ものあり。半はんを贈たまはんと云いふ。福徴ふくてい其銀そのぎんの數かずを問とふ。皆みな此溪水このせきみづを渡わたると云いふ。襪わを脱ぬぎ其時そのとき遺おぼす。若も拾ひろふ者ものあり。半はんを贈たまはんと云いふ。福徴ふくてい其銀そのぎんの數かずを問とふ。皆みな此溪水このせきみづを渡わたると云いふ。襪わを脱ぬぎ其時そのとき遺おぼす。

符合ふあひしけし。悉ことごとく還かへし。與あららけし。此人このひと半はんを分わけ贈たまはんと云いふ。福徴ふくてい曰いふ。吾われの其半そのはんを食くむ程ほどあり。始はじめと云いふ。汝なは又また還かへし。疾持はやもちて歸かへる。いづく今いま此所このところに待居まちらんや。と云いふ。受うけとる。此人このひと拜謝はいせし。去さる。長年ながねん福徴ふくていと云いふ。郷薦きやうせん。免狀めんじやうを領りやうす。萬曆まんりき乙未おつみの年ねん進士しんしとある。追おひ追おひ。終つひに換列かへりの太守たうしゆとある。後職のちしやくを辭やめ。家いへに歸かへる。長壽ちやうじゆを得える。終つひりとある。

旅次監生

京師きやうしの分負ぶんふ者もの數人かず相議あひまり。銀十兩ぎんじゆりやうを貸かす。貸本かひてと云いふ。我われ鳥たを焼やく。如何いかに賣うす。渡世わたせとせん。則すなはち傾銀店かたがねてんあり。鑿のこを借かりす。其銀そのぎん成割なりわりと云いふ。如何いかに一けん割勢いっけんわりせいあり。其重そのおも八錢はちせん目めをり。一塊いっくわい飛散ひさんと見え。方々たうたう尋たずねる。

共多ふんえぞ。後ぬ互ふ争裏ふ及び々せむせん方ちりく帰すなり。
 翌日ふ至りて其者共又此所ふ集り争論し其家の樓上ふ旅宿
 せし。監生無学の入金をかて秀才の類あり。彼等下り来り其故を向ふ
 衆あつぐの由を生口けし。監生曰吾昨夜樓門の檻のりふ銀一鬼と
 得し。此女等が失ひ銀あるべし。返り與へるは皆々大い喜ぶ。半
 を監生に贈らんと云。監生辞し曰吾銀を得んと欲り拾ふるは匿して
 言登りて。且爾等債来り銀を吾何ぞ分ちるふ忍んじとく受せむ
 けし。衆あつぐ其恩は感んじ喜ぶ。歸りて何と云く此恩を報せんを
 圖つて。其後此者共追り利を得て世を渡り。或時其邊へ小児を鬻ぎて
 伴ひ事者あり。彼等此由をば付て則三百文ふ買ひて。相義しく監生よ

送アし。僕ふせんとも。直ふ旅宿へ伴ひ行り。此小児監生をえと。参り
 と呼と泣か。監生も涙を流し喜ぶ。此児ハ監生の子と云ハ
 歳多り。三月むり前ふ張家湾と云ふ地あり。奸人又勾引きて
 失ひたり。監生又皆々銀を與へ。厚く謝りて歸りたり。

哈九

江南名の早西門の傍ふ。回々園と云ふ。来りて。哈九と云者あり。飯を賣
 を業と居り。ある時江浦名の者。年貢の銀五十兩を推乃来り。忘
 置と云々。其跡少く。哈九此をえり。急ふ追懸く其主ふ返り。此人
 喜ぶ。感んじ別と云。金を忘れり。人江浦名ふ至り。時大風ゆ舟
 一艘覆らる。思ふ。今日忘と置る金を。哈九が我ふ返り得せり。

滅不意の財を得る。さきを此金ゆく陰徳をたまふと。始に漁舟を呼んで
 日一人を救ひ得る。銀五両を與へると呼ぶ。其漁舟共多く来て手々
 小働ける。只一人を救ひ得る。其姓名を尋ねると。ハ九が
 子ぬく有る。と云。

黄中

順治の年。比龍谿名の農夫黄中と云者。其子小三と小舟に乗る。漳
 列の東門に往く。糞を買ひ父子廁より擔ひて去る。其廁ぬき腰袂一
 を拾ひ得る。舟に持帰りて。開き視ると。白銀六封あり。黄中曰。此ハ必此
 廁ぬへる者の志。さきさき。富貴の人ある。自身銀を腰に付け
 り。貧乏人ある。此程の銀ゆく。命も係る。尋来る人を待居て返す。

與ふべし。と云く。小三ハ父の言を迂固ある。様々争ふ。心も
 聴へざる。怒り成。會み父を告ぐ。獨家に歸りて。叔黄中へ久し
 く待居。遂向より周章と走り来る者あり。急ぎ廁ぬへり。見廻し
 徘徊し。辨位を。黄中呼ぶ。其故を問ふ。答曰。我父罪ある。山賊と云
 ぬ吾父を指して。黨と云ふ。故に列守我父を獄に入る。此頃ある貴人
 小喝し。此の哀歎を。折へ彼貴人の叔に頼む。列守父を救ふ。と云ふ。
 謝禮として。銀百二十両を贈らんと約せり。そして。田宅を。親友に
 助力を乞ふ。半を得る。先を贈りて。父を獄より出さす。はく
 後父子力を竭し。其餘を。今日此銀を。腰に付く。道を急死し。が
 此所ゆく。廁ぬへり。銀の包を解く。用事を辨すとす。が。廁を。時餘す。



華本繪像模寫



查孝廉培結
 雪の目
 乞食鐵丐を
 姑と
 酒を酌

心遠く。かの銀を其儘忘置ぬ道ゆく其の成りひゆりて奔り還り尋
 索も見えず。此銀を失と父の死を救ふ術を盡すも涙を流し
 悟りて其の黄中祇の色と銀の數と成。具の尋るる皆符合しけり。其銀
 あり。我久しく汝を待居るも返らぬ。其人驚愕喜す。一封を分ち
 贈らんと云。黄中辞し曰。我貪るか。六封を還し。一封は受んや。汝
 速に行へと云けり。其人厚く謝し。去る。黄中へ小三を待居るも
 来りけり。舟を漕せ。舟の棹さす。帰る。中途ゆく卒に風雨起る。故わたり
 近の村里へ舟を漕寄せ。風雨を凌ぎ居る。被大雨ゆく川岸より崩
 る。跡の獲一ツの黄中此を見。米を儲る器と云ふ。舟へ取
 入るとせ。其獲錫めく口を封し。中何物を納し置たり。甚重し

一舟をく舟へ取乗せ。其間雨を風靜す。月梢明る。舟を漕せ。家へ歸り。早夜半ぬ。家へ小三今日の事を
 母の語す。兩人皆謂く居る。黄中戸を開き呼け。共應へ。母
 曰。汝傷く。我路ゆく室の獲を得。早く内へ取入れよ。云。母
 子共驚愕出来。舟中を。六月の光ゆく。獲の口耀き。雪の如く
 西。兩人喜く舟より家へ入。錫を鑿ら。内皆白銀。大抵千金
 計も有らんと見。黄中大驚。始偽く言。信あり。更
 云けり。此鄰家へ唯一重の葦牆を隔。三人の言皆洩。其
 人賞を得んと。翌日此由を縣令へ訴へけり。即黄中を執。此を訊
 黄中少も藏さ。昨日銀を還。事。獲を得。具の言はけ

人の許しをて使れをかきく。足下金を還りし惠小下と。事既小潜へ其
 の日婚する事。此婚ハ君の力也。其日中此館の主人と。足下と小樽酒を進
 せん必来り玉へと云ふ。生固く辭しと云ふ。主人曰我へ暇る事行難し。汝
 辭退すべくと云故。生まらち行へと約し。其便を返し。已み其日
 小成と往く見ける。家のま有徳小見。未ハ必むくむ。つとてく。さるる
 立寄く。門前の小川の邊を向歩し居ける。一葉の扁舟を漕来る。其中小
 麗服し。花や髪を束る婦人。面を掩く坐し居る。則新婦なり。岸
 近くある時。生あつ彼婦人を視る。紛るる故の妻なり。此時婦人
 もふと生を視る。故の夫なり。各駭く生ハ草の上小は。偃息。妻ハ舟の中
 位伏し居る。扱門前小潜着ける時。婦人岸へ上ると云へ共。面をも掩く。

泣居る。惟く其故を問ふ。答く曰。只今一人の男子を視る。小故の夫
 小善似る。故小悲死小堪ふ。つと云ふ。そ如何様なる人ぞと云へ。其
 其年長衣冠を具ふ。答へる。小生小紛るる。此家の主人扱くと
 答ふ。急死生を尋求む。生ハ草の中小位臥し起得る。何故ぞ。と
 問へど。答へず。強く問ふ。只今一人の婦人を見し。と云く。涙小
 咽と詰り得む。其人曰。我已小明小知。是婦人ハ足下の故の妻なり。前
 日足下我金を拾ひ得。其金ハ則君の金なり。足下我を重くと。此
 を吾小還す。吾其金ゆき。婦人を贖する。天よ。我小命と。足下夫婦
 をわせしむる。吾前日足下の金を返さ。義小感。故小今又。是婦人を
 足下小還すと云く。共生ハ事。權る。肯へむ。其人則旅諸主人

非門録卷之五

二

